

学校だより

令和8年8月28日

ふれあい

No. 5

編集発行
上越市立春日小学校

校長 田邊 道行

長い夏休みが終わり、本日から2学期が始まりました。約1か月ぶりに登校した子どもたちは、顔つきが少し大人びたり、身長が伸びたりしており、一人一人の成長を感じました。

さて、本日の始業式では、私が夏休みに参加した災害ボランティアでの経験を基に、次のような話をしました。ご家庭でも、親子で話し合うきっかけにいただければ幸いです。

夏休み中の手伝い

皆さんは夏休みに、家族や誰かのために「お手伝い」をしましたか。

食器を片付けた人、掃除をした人、荷物を運んだ人、弟や妹のお世話をした人もいるかもしれません。

手伝いとは、相手がしてほしいことや困っていることに気付き、自分にできることをすることです。また、誰かに頼まれてすることもあるでしょう。

私も、この夏休みに手伝いに少し似たことをしてきました。それは、災害ボランティアです。

これまで参加した災害ボランティア

私は、2004年の新潟県中越地震のときに十日町市へ行き、初めて災害ボランティアに参加しました。きのこの工場の倉庫で、崩れそうに積み重なったケースを片付けました。

2011年の東日本大震災では、福島県新地町の避難所で、被災した方の話を聞いたり、励ましたりする活動をしました。このように、人の気持ちに寄り添うことも大切なボランティアです。その後、宮城県石巻市の「雄勝ローズファクトリーガーデン」で、花壇を整備する活動にも参加しました。

2016年の熊本地震から1年後に熊本城を訪れたときには、天守閣が工事中で、様々な場所の石垣が崩れていました。崩れた石には番号が付けられ、元の位置へ戻すために一つ一つ並べられていました。



能登半島の被災地へ

今年の夏は、熊本県でボランティアをしようと考えていました。しかし、熊本県には多くのボランティアが応募していて、定員がすぐに埋まってしまいます。そこで、2年半前の元日に発生した能登半島地震の被災地である、石川県七尾市へ行くことにしました。

8月12日から14日までの3日間、とても暑い中で災害ボランティアをしてきました。

災害ボランティアには、被災した方の気持ちに寄り添う支援や、重機などを使う専門的な支援など、様々な活動があります。私が参加したのは、家の片付けや清掃、ごみの搬出などを行う「作業系」の支援です。



思い出を大切にしながら進めた片付け

日によって異なりますが、6人から12人ほどの仲間と一緒に作業しました。

最初に作業したのは、地震の後、住んでいた方が娘さんの家へ移り、そのままになっていた家でした。

「基本的には、全部捨ててください」

そうお願いされました。しかし、何でもすぐに捨ててよいわけではありません。

片付けていると、その家で暮らしていた方の思い出につながるものも出てきます。そのようなものは、本当に捨ててよいのか確認してもらうために、「確認ボックス」へ入れました。

捨てる物も、何でも一緒に捨てられるわけではありません。七尾市のごみの分別ルールに従い、一つ一つ細かく分けました。その作業にも、多くの時間がかかりました。

作業した3日間は、とても暑く、家の中にはものすごい量の荷物がありました。そのため、1日に一部屋ほどを目安に片付けました。

1日目は、玄関と応接室にある細かな物を分別し、テーブルやソファ、棚などの大きな家具を、みんなで力を合わせて運び出しました。

2日目は、台所と居間を片付けました。電気が止まった冷蔵庫の中には、2年半前の食べ物がそのまま残されていました。強い臭いがするものや、どろどろになったものもありましたが、それらも一つ一つ取り出し、分別して片付けました。

3日目は、地震によって使えなくなった倉庫を、もう一度使えるようにしたいという家で作業しました。使えなくなった仕事道具などを全て外へ運び出し、倉庫の中を掃除して、使える机や棚を元に戻しました。



今も残る地震の爪痕

3日間、毎日ごみを軽トラックに積み、ごみ処理場へ運びました。その途中、町の中には今も地震の爪痕が残っていることに気がきました。地震で飛び出したマンホールの周りにアスファルトを盛り、道路がでこぼこしている場所。アスファルトの下が空洞になり、通れなくなっている歩道。壊れた石畳を取り外され、その部分だけがアスファルトで直されている場所。町の様々なところに、地震による被害が残っていました。

能登半島地震の発生から、既に2年半ほどたっています。しかし、実際に現地へ行ってみると、「2年半たったから、もう元通り」というわけではないことが分かりました。

私たちは、テレビや新聞などから災害の情報を得ています。しかし、新たな災害が起こると、以前の被災地が報道される機会は次第に少なくなります。報道されなくなると、私たちも被災地のことを忘れがちです。しかし、現地には、2年半という時間がたった今、ようやく生活を立て直そうとしている人もいます。



「変な人」に込められた意味

今回、能登半島で活動していたとき、ボランティアのリーダーが笑顔で、こんなことを言いました。

「ボランティアに来る人って、“変な人”が多いですよ」

私は最初、「変な人？」と思いました。もちろん、これは悪口ではありません。なぜ、そのようなことを言ったのでしょうか。



ボランティアをしても、お金をもらえるわけではありません。暑い中で汗をかきながら重い家具を運び、汚れたものや強い臭いのするものも片付けます。それでも、自分の時間を使い、遠くからやって来て、誰かのために働いている人たちがいます。自分が得をするか、損をするかではなく、「困っている人がいるから、自分にできることをしよう」と考えて集まった人たちです。そういう意味では、お金にならない仕事を進んでする「変な人」なのかもしれません。

不思議なことに、そう言われても、一緒に活動していた人たちは誰一人怒ることなく、「変な人」という言葉に笑顔でうなずいていました。

「ありがとう」が行き交う場所

そして、私はもう一つ、大切なことに気がきました。

ボランティアをしていると、「ありがとう」という言葉をたくさん聞きます。

活動を依頼した方から、「ありがとうございました」。

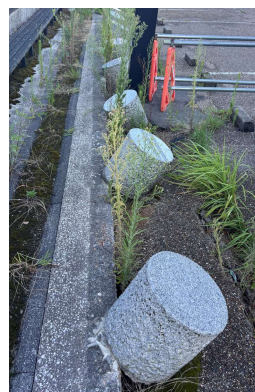
一緒に働いた仲間からも、「ありがとう」。

そして、活動を終えた私たちも、「ありがとうございました」と言って帰ります。

不思議ですね。人を助けに行ったはずなのに、助けた側も「ありがとう」と言っているのです。

私は、たくさんの「ありがとう」が行き交うその場所を、とても幸せな場所だと感じました。

そこに集まった人たちは、単なる「変な人」ではありません。お金の価値だけでなく、「ありがとう」という言葉の価値を知っている人たちなのだと思います。



自分にできる小さな一歩を

さて、最初の質問に戻ります。

皆さんは夏休みに、誰かのお手伝いをしましたか。

ボランティアというと、遠い被災地へ行き、特別なことをするものだと思うかもしれませんが、しかし、その始まりは、もっと身近なところにあるのではないのでしょうか。

困っている友達に気付く。

重そうな物を持っている人がいたら手伝う。

誰かが一人で作業していたら、「手伝おうか」と声をかける。

自分にとって得か損かではなく、「この人のために、自分にできることはないかな」と考え、一歩動いてみる。そんな人が、この学校に一人、また一人と増えていけば、学校の中にも「ありがとう」が増え、幸せがあふれる学校になると思います。

一昨日、教頭先生が、皆さんが使うトイレの床を、這うようにして丁寧に磨いてくれました。すると、山岸先生や山際先生をはじめ、ほかの先生方も一緒になって、床をきれいにしてくれました。

先生方には、ほかにもしなければならぬ仕事がたくさんあります。それでも、「皆さんに、トイレを気持ちよく、きれいに使ってほしい」という願いを込めて取り組んでくれたのです。

2学期、皆さんの周りにも、誰かのためにできる小さなことが、きっとたくさんあります。

ぜひ、それを見付けてください。そして、少しだけ自分の損得を忘れ、誰かのために動ける人になってください。

「ありがとう」がたくさん生まれる2学期になることを楽しみにしています。

